

日本語指導担当教員の語りから見る「やさしい日本語」 —SCATによる質的分析を基に—

Perspective of a Japanese Language Instructor on “Easy Japanese”

—Qualitative Analysis Based on SCAT—

安井朱美
Akemi YASUI

坂本勝信
Masanobu SAKAMOTO

要旨

本研究の目的は、小中学校における教員対象の「やさしい日本語研修会」のあり方を探る参考とするために、外国人児童多数在籍校で日本語指導担当教員として長年勤務する、ある教員が「やさしい日本語」をどのように捉えているかをインタビューから知ることである。その結果、普及に関しては一定の効果に達成感を感じつつも、周囲の教員には高い期待は抱いていない現状が見られた。また「やさしい日本語」をユニバーサルな存在と見なす一方で、その果たす役割の制約性を認識していることが明らかになった。そして研修会については、継続すべき点及び言語化すべき改善点のヒントが得られるとともに、自分事として捉える意識涵養の場となりうることが示唆された。

キーワード：やさしい日本語、教員対象のやさしい日本語研修会、日本語指導担当教員、SCAT分析

1. はじめに

1990年代以降、日本の在留外国人はコロナ禍などを除き増加し続け、2023年6月末の在留外国人数は322万3,858人と過去最高を記録している（出入国

在留管理庁調べ)¹。また同時に、公立の小・中・高等学校等に在籍する外国籍児童生徒²も増加しており、文部科学省³によると、2021年5月1日現在、日本語指導が必要な児童生徒数は58,353人（外国籍児童生徒数：47,627人、日本国籍児童生徒：10,726人）となり、言語別ではポルトガル語を母語とする割合が全体の約4分の1を占め、最多だという。

日本語指導が必要な児童生徒の増加は、言語的、文化的背景の複雑化、多様化に繋がり、教育現場では、その対応に苦慮してきた。このような状況下で、国は日本語指導と教科指導を統合して教えるための「学校教育におけるJSLカリキュラム」⁴を開発し普及を行っている。また、2014年度より小中学校における取り出しの日本語指導を正規の教育課程である「特別の教育課程」⁵として編成・実施することが可能となった。本制度は、児童生徒が学校生活を送る上や教科等の授業を理解する上で必要な日本語の指導を在籍学級の教育課程の一部の時間に替えて、在籍学級以外の教室で行う教育の形態である。

国の施策の下で公教育において外国人児童生徒の指導に携わる教員には、主に学級担任や教科担当教員と、取り出し指導⁶にて教える日本語指導担当教員や指導補助者がいるが、その他にも、在籍学級での授業中に教室に入って当該児童生徒を支援する「入り込み指導」に関わる支援員⁷や課程外の指導協力者として地域人材・外部人材もおり、外国人児童生徒教育の人材・組織リソースは多岐にわたる。より充実した教育を行うためには、関係者、関係団体との連携や情報の共有が求められ、その面において学級担任と日本語指導担当教員の果たす役割は大きい。

このような外国人児童生徒教育に関わる教員の抱える課題を調査した、あるいは、調査の一部とした研究は多い（古川2017、臼井2016、三好2022、滑川2023）。滑川（2023）は、「特別の教育課程による日本語指導」を受ける児童の担任教員などを対象にした調査結果を分析し、教師自身が児童や保護者とのコミュニケーション上の言葉の壁に直面し、言語能力の不足に苦悩する実態を報告している。しかしながら、「一人の教師が日本語に通じない子どもたちの話す全ての言語を理解することは不可能」（石井・川崎2022：13）である。そこで代替のコミュニケーションツールとなるのが、「やさしい日本語」

である。

筆者坂本の前任校は浜松市にあるが、同市は外国人児童生徒が非常に多く、2023年は、1,888人と過去最高値を記録している。教育委員会は、バイリンガル支援者を小中学校に派遣するなど様々な支援体制を整えてきているが、少数しか在籍しない言語に対応できる支援者の確保が困難になってくるなどしたため、2019年、学校において「やさしい日本語」を普及させることを決めた。坂本は同年教育委員会より依頼を受け、市内小学校の教員7名他とともに、『学校版「やさしい日本語活用のための手引き」～保護者への学校からの便り・成績表～』（以下、「手引き」）を作成した。その後、2021年より年に2回、手引きを使用し浜松市内の小中学校にて「教員対象⁸のやさしい日本語研修会」（以下、「教員対象やさ日研修会」）を開催している。

研修会をより充実したものとすることを目的に、筆者らはアンケートを作成し、研修会終了後に回答してもらっている。アンケートは、1)「外国人児童と関わることで普段感じていること」2)「研修会の満足度とその理由」3)「研修会で特に役に立ったと思うこと」4)「やさしい日本語にする際に特に難しいこと」などの質問項目から成る。4校計121名分の分析結果が、坂本・安井（2023）で述べられている。1)については、教員は「授業」に関する問題を強く認識していることがわかり、2)では、「語彙が少ない低学年児童に対しても活用可能なことに気づいた」「やさしい日本語についての共通認識が全教職員で持てた」などの自由記述が観察された。また、3)に関しては、「やさしい日本語化のポイントがつかめた」「やさしい日本語に言い換える配慮の必要性に気づけた」「普通の日本語の後にやさしい日本語を添える重要性がわかった」など、4)では、「どの語が普通の日本語でどの語がやさしい日本語か見分けること」「易しい語彙・文法に言い換えること」などの回答が多かった⁹。

しかし、研修会で取り上げている「やさしい日本語」自体をどう捉えているかを知るには質問紙調査では限界がある。そこで、現場の教員がやさしい日本語をどのように捉えているのか知るために、2022年の研修会後に、受講者である教員数名を対象にインタビュー調査を行った。

本稿では、長きにわたって日本語指導担当教員として取り出し指導に携わるとともに、学内でやさしい日本語の普及に尽力してきた、ある小学校の日本語指導担当教員のインタビュー内容を取り上げることとする。以下、第2章にて浜松市及び、当該教員の勤務地である小学校の外国人児童生徒の実態と支援体制、また「教員対象やさ日研修会」について記し、第3章にて問題の所在と本研究の目的を述べる。

2. 浜松市の外国人児童生徒の実態と支援体制

2.1 浜松市の実態

浜松市教育委員会（2023）によると、外国籍児童生徒の人数は、2008年に全児童生徒の25％に相当する1,700人まで増加し、リーマンショック後2009年から2014年に一時的に減少したものの、2015年以降増加傾向が続き、2023年は、1,888人（小学生1,252人、中学生636人）と過去最高値となったとのことである。国籍別内訳は、5割近いブラジルを筆頭にフィリピン、ベトナム、ペルー、中国の順で、計27か国と多国籍化が続き、使用言語も、26言語に及ぶ。また、永住希望の外国人が増加し、滞在期間も長期化していることから、日本生まれ日本育ちの外国籍の子供たちが増えており、2023年4月入学の外国籍の小学1年生の79.8％を占めるといふ。

2023年5月時点、外国籍児童生徒は、84.2％の小中学校におり、30人以上の多数在籍校は、全体の14.3％、1～9人の少数在籍校は全体の48.4％となっている。また、行政区によって子どもの国籍にも特徴があり、ベトナム国籍が多い地区、ペルー国籍が多い地区、多国籍の地区、かつてはブラジル国籍が多かったが、最近は多国籍化が進む地区、フィリピン国籍の多い地区などに分かれている。

2.2 浜松市の支援体制とA小学校が市から受ける支援体制

齋藤・池上・近田（2015）によると、浜松市は、少数在籍校が広域に分散し、公共交通機関で各地域をうまく結べないことなどから、日本語指導が必要な子どもたちへの支援は、支援者を在籍校に派遣し、在籍校で学校が中心

となつて行う方式がとられているという。また、市教育委員会の教育支援は様々あるが、大別して、1) バイリンガル支援者の学校への派遣、2) 相談員の学校訪問、3) NPO法人への委託事業、の3種がある。これ以外に国からの補助を得て、加配された教員が取り出し授業などを担当しており、特に多数在籍校には複数の加配教員が配置されることもあると述べられている。

バイリンガル支援者として「外国人児童生徒就学支援員（以下、「就学支援員」）と「外国人児童生徒就学サポーター（以下、「就学サポーター」）が派遣される。前者は、多数在籍校に常駐するポルトガル語（13人）、フィリピン語（1人）と日本語とのバイリンガルであり、校内での通訳・翻訳業務（保護者対応時の通訳や母語による電話連絡含む）、授業への入り込み支援¹¹を行っている。一方、後者は、ポルトガル語、スペイン語、中国語、フィリピン語、ベトナム語、インドネシア語、英語が対応可能であり、曜日固定で週に数回、多くは複数校を担当する。

本研究の対象者である教諭の勤務校、A小学校は、フィリピン国籍の子どもが多く在籍する地区にある。同校は、2022年度全校児童679人中外国籍児童が35人¹⁰おり、多数在籍校に分類される。また、フィリピン語の就学支援員が1日6時間5日間、週30時間勤務しており、上述の業務及び、入り込み支援を行っている。

2.3 教員対象のやさしい日本語研修会

浜松市教育委員会（2023）によると、教員及び支援者・指導員の資質向上を目的に、初任者研修会、外国人児童生徒指導担当リーダー研修会（年6回）、日本語指導担当教員を対象としたスキルアップ研修会（年2回）、教科指導員研修会（小中合同年6回）、バイリンガル支援者研修会（年5回）、日本語指導加配教員研修会（年1回）など10の研修を開催している。そのうちの一つにやさしい日本語研修会があり、筆者の坂本が2021年より毎年小中学校2校区程度を対象に2023年度までに合計6回実施してきている。以下にその主な内容を記す。

研修会は、1時間30分程度で大きく、1)「やさしい日本語」の概要とその

必要性に関する講義、2)手引きを使用した、やさしい日本語化のポイント解説とワークショップ形式による練習、の2つのパートで構成される。

1) の講義では、災害時において言語的弱者である外国人は災害弱者になりうること、国内では、英語が通じない外国人が多いこと、日本語力初級修了レベルの外国人のほうが日本人の小学校1年生より語彙量のはるかに少ないとされることなどの紹介がされ、その問題解決法の一つとしてやさしい日本語の存在に気付いてもらうなどしている。また、日本人母語話者が考える「丁寧な日本語」が外国人にとっては必ずしも「親切な日本語」ではないこと、生活言語能力（BICS）と学習言語能力（CALP）との違い、普通の日本語にやさしい日本語を添え、日本語力の向上にともなってやさしい日本語の使用を減らしていくのが望ましいこと、やさしい日本語に正解はなく分野（減災、観光、自治体の窓口、交流、教育、学校発出の文書など）によって、あるべき姿が異なることなど、事例を示しつつ理解してもらっている。

2) のワークショップでは、手引きにある、学校の便りや成績の「普通の日本語」をやさしい日本語化するコツを学んだ後、練習問題に取り組んだり、授業時の教師の発話例の言い換えをグループごとに考え、全体で共有した上で、改善例を検討したりする活動を行っている。また、「進んで掃除をやる」「前に進む」「時計が5分進む」「授業が進む」「病気が進む」など多義語の存在に気付いてもらい、語義の難易度を見分ける練習なども取り入れている。

3. 問題の所在と研究の目的

やさしい日本語研修会については、岩田・柳田（2020）が「今や災害時に限らず日常的な情報伝達に使おうという意識が多くの自治体に共有されるようになり、自治体の窓口でも『やさしい日本語』研修がさかんに行われるようになってきている」（p.9）と述べるように、自治体職員などが対象になることが多い。「減災のため」であれ、「平時において」であれ、外国人住民に関わる頻度が高い役所が外国人住民とのコミュニケーションツールであるやさしい日本語に注目したのは必然で自然な流れであるのではないだろうか。それに比して、小中学校の教員対象の研修会は、管見の限り、静岡県教育委員会

(2020) 他2件しか見当たらない。各所でやさしい日本語の普及活動を行っている、やさしい日本語ツーリズム研究会のホームページには講演やメディア実績がリスト化されているが、「自治体・職員向け」「自治体・観光関係向け」講演の59件に対して、小中学校の教職員も含まれる可能性がある「教職員・PTAなど」は11件に留まっている¹²⁾。

以上のように、「教員対象やさ日研修会」は、自治体関係者向けほど広がっていないように思われる。それゆえ、やさしい日本語に特化した研修会の在り方を探ることを目的とした研究は進んでおらず、上述の坂本・安井（2023）も教育現場の教員の生の声を深く追究するまでには至っていない。

そこで、筆者らは、長年日本語指導担当教員として外国人児童への指導に関わり、学級担任との連携や学内におけるやさしい日本語の普及に取り組んできた小学校教諭へのインタビューを行った。本研究の目的は、「教員対象やさ日研修会」のあり方の参考にするため、インタビューの分析を通して、当該教員のやさしい日本語の捉え方を明らかにすることである。

4. 本研究の調査概要

4.1 調査対象及び調査協力者

本稿で調査対象とするのは、筆者らが2022年9月に静岡県浜松市にあるA小学校で行ったインタビュー調査である。調査協力者Tは、大学を卒業してから数年間小学校等で教鞭を執った後、2000年代初頭にJICA（独立行政法人国際協力機構）の青年海外協力隊で小学校教諭として中央アメリカにある国に派遣され2年後に帰国。それ以来教壇に立ち続けているベテラン教諭（以下、T教諭）である。このうち日本語指導をしていたのは帰国後の15年ほどで、外国人担当や通常級の担任として浜松市内の小学校4校で勤務という経歴を持つ。インタビュー時にはA小学校で教務主任という立場であった。

4.2 調査方法

外国人児童が多い小学校で彼らの日本語指導を長年行ってきたT教諭が「やさしい日本語」をどのように捉えているのかを探る目的のインタビュー

は、勤務校であるA小学校の教室で、T教諭のプライバシーが守られる状況で、授業時間外に40分ほど行われた。T教諭にはインタビューの目的及び内容を事前に説明し、インタビューデータを研究に使用することについての承諾を得た。半構造化インタビューでの質問項目は、外国人児童が多い小学校で働くT教諭が「やさしい日本語」についてどのように捉えているのかを中心に聞いた。インタビューデータは、すべて文字化し、小さな質的データ分析にも有効であるとされているSCAT (Steps for Coding and Theorization) を分析方法として選んだ。大谷 (2011) によると、SCATはセグメント化したデータを記述し、そのそれぞれに〈1〉データ中の着目すべき語句、〈2〉それを言いかえるための語句、〈3〉それを説明するようなテキスト外の概念、〈4〉そこから浮き上がる、前後や全体の文脈を考慮したテーマ・構成概念、の順にコードを考えていく4ステップのコーディングと、〈4〉のテーマ・構成概念を紡いで記述するストーリーライン、そこから理論を記述する手続きとからなる分析手法である。表1に、SCATの〈1〉から〈4〉までの本研究の分析

表1 SCAT分析結果例：T教諭の語り（一部）

通番	テキスト	〈1〉 注目する語句	〈2〉 言い換え	〈3〉 〈2〉を説明するテキスト 外の概念	〈4〉 テーマ・ 構成概念
89	「やさしい日本語」？ さっきも言ったように「やさしい日本語」って1つの新たな分野なので、難しいって捉えられるっていうこととか、そこまでしなくても、通訳さんに代わればっていうことですよ。あと、成績も「やさしい日本語」で書いてね、書いてもいいんだよって言い続けて10年以上経つけど、誰もやらないから。	「やさしい日本語」って1つの新たな分野なので、難しいって捉えられる/通訳さんに代われば/成績も「やさしい日本語」で(中略)10年以上経つけど、誰もやらない	「やさしい日本語」に対する印象、 学校での通訳重視傾向、 成績評価面での諦め、 「やさしい日本語」が広がらない現状	市からの通訳派遣、 学校現場に広がる通訳依存体質、 現状の客観的な把握	普及進まぬ「やさしい日本語」、 通訳の恩恵と障害、 周囲への期待値の低さ

結果例を一つ挙げる。

5. 調査の結果

外国人児童が多い小学校での日本語指導経験が長いT教諭が「やさしい日本語」をどのように捉えているのかを中心にインタビュー調査を行った。そして得られたデータをSCAT分析し抽出された構成概念は「気づきを促すきっかけとなる研修会」「一定の成果に対する達成感」「周囲への期待値の低さ」「文書の恒久性に対する懸念」「自分事として捉える意識と場」「ユニバーサルな存在」「果たす役割の制約性」「潜在的な可能性を有するもの」の8つである。以下、本節ではそれらを順に述べていく。

5.1 【気づきを促すきっかけとなる研修会】

前述したように、筆者の坂本は浜松市教育委員会からの要請で外国人児童数が多い小中学校で「教員対象やさ日研修会」を行っている。T教諭の勤務歴のある学校のうち4校はいずれも外国人児童数が多く、浜松市による行政の支援が比較的手厚いところである。そのような場所で研修会を開催する意義をT教諭は次のように語っている。

- (1) T：大きいところにやることはすごく大事なことで、私もずっと「やさしい日本語、やさしい日本語」って言い続けてきたけど、浸透はしないです、先生達に。(通番48)
- (2) T：あと、もう通訳がいなくて、自分で連絡しなきゃいけないとかっていう時にこういう研修が生きると思うし、違う学校に行った時に支援(筆者注:「バイリンガル支援者」を指す)いないんだってなった時、「やさしい日本語ってなんだっけて、こう振り返ってくれることって大切だと思うんですよね。(通番99)

外国人児童が初めて学校に編入した場合、バイリンガル支援者(就学支援員や就学サポーター)が初期適応指導を行い、その後、日本語・学習支援業

務委託により、NPOから学校に日本語・学習支援者が派遣され、日本語基礎指導を取り出しで実施する、というところまでは全ての対象児童に対して実施されている。つまり、その学校に該当の児童生徒が在籍さえしていれば、その人数に関係なく取り出し指導は実施されることになる。ただ、加配措置により校内で取り出し指導を行う教員や任用職員である教科指導員が配置されていなければ、取り出しによる日本語と教科の総合学習の実施は難しくなる。このような場合は学級担任や教務主任などが取り出し指導を行なわざるを得ないのが現状である。しかし、外国人児童が多い学校ではT教諭のような日本語指導担当教員や通訳がいる可能性が高くなるので、外国人児童やその保護者とコミュニケーションがとれない場合は通訳や日本語指導担当教員に対応を任せることができるわけである。そのような多数在籍校で開催される「やさしい日本語」研修は新たに学んだことがすぐに教育現場で活かされるようなものではないかもしれない。だからこそ、研修会は「やさしい日本語」そのものの存在や必要性に気づかせる契機となるものだとしてT教諭は評価をしていることがうかがえる。

5.2 【一定の成果に対する達成感】

では、T教諭自身は「やさしい日本語」をどのように現場で普及させようとしていたか、またその成果がどのような形で見られたかは以下の語りからわかる。

- (3) T：私はいつももう15年前から教務の先生、教頭先生に「やさしい日本語つけて」って言ってたんです。その当時、「やさしい日本語」って言ってなくて。で、「いつもありがとうございます」、台風の時は「なんとかかんとかで、今度運動会がなんとかかんとかです」って。長い文章の最後に「明日運動会はありません」ってつけてくださいとか、「雨の時はありません」とか、「お弁当持ってきてください」って、それだけでいいからっていうことを伝えていったんです。(通番53)

- (4) T：そしたら、やっぱり教務とか教頭先生って頭がいいから、最初のうちはひどい日本語だったのが、もうどんどんどんどん上手になってって。その年の1年の最後には、もうこんな長い文章がこんな“びっ”て、短くなってメールを送られてきたんです。「すごい！」って。「おー、教頭先生すごい！」と思って。(通番54)
- (5) T：なんかそういう風に伝えていけば、その管理職の人とか教務の先生とかもやってくれるし、今、そういう先生がこいつ(筆者注:「やさしい日本語」)にしたら、そういうのつけたらって、きっと言ってくれてると思うので、地道な努力が必要かなってね。(通番55)

T教諭は「やさしい日本語」普及の壁は高いと感じながらも、不断の努力を続け、その努力が実を結び一定の成果が見えつつあることに達成感を感じている。立場ある教員がたとえ一人でも「やさしい日本語」の実践例を現場で示したり周囲に使用を促したりすれば、その人を通して「やさしい日本語」が現場全体に伝播されるだろうという期待もあるようだ。

5.3 【周囲への期待値の低さ】

ところが一方で、周りの教員に対するT教諭の期待はそれほど高くないことがうかがえる語りもある。

- (6) T：(「やさしい日本語」は) 広がらないですし、なかなかその、納得してもらったり、納得してはくれるんですけど、使うとこまではいかないと思うんですよね。でもそれを絶対にやらせようとは私は思ってないので、あの、分かってくればいいし。やってくれたらありがたいなっていう。(通番86)
- (7) T：先生が1人でもいて、やってくれたらもう100パーセント、110パーセントって思ってるので、目標をそこまで高く設定してな

いので。〈なるほど〉やれることはやるけど、結果は求めないってこと。(通番87)

- (8) T : 「やさしい日本語」？ さっきも言ったように「やさしい日本語」って1つの新たな分野なので、難しいって捉えられるっていうこととか、そこまでしなくても、通訳さんに代わればっていうことですよね。あと、成績も「やさしい日本語」で書いてね、書いてもいいんだよって言い続けて10年以上経つけど、誰もやらないから。(通番89)

T教諭は「やさしい日本語」という概念を他の教員にも周知し理解してもらい重要性を認識している一方で、使用の強制はしていない。それは通訳など外国語で支援ができる人材が常駐する学校では、多忙な教員達にとって「やさしい日本語」の優先順位がどうしても低くなってしまふことと関係があるようだ。長年普及に向けての努力を続け職務を果たそうとするT教諭の熱意や使命感、責任感とともに、客観的な状況把握からある種の諦観も感じられる。

5.4 【文書の恒久性に対する懸念】

(8) でT教諭は「やさしい日本語」を「新たな分野」のもので「難しい」と捉えていた。その背景にはいったい何があるのか探るため「やさしい日本語」は口頭より筆記のほうが難しいのかと尋ねたところ、T教諭は次のように答えている。

- (9) T : 断然そうですね。やっぱり残りますし、あとに。あの、自分はスペイン語しゃべれるけど、じゃあ、日本語の文章、スペイン語に書けるかって言ったら書けないです。その、ある程度のことは書けるけど、「文書」として出せるかって言ったら出せないです。言葉だったら語順が逆でも、間違っても、「なんとかだよね、なんとかだよね」って言いながらこう進められるけど、

文章にする時って、主語から最後の述語までちゃんとしなきゃいけないですね。「やさしい日本語」とはいえ。だから、文で書くっていうのはすごく抵抗あると思います。(通番101)

- (10) T：ただ、お便りとか出した時に私がいつも言ってるのは、遠足のお知らせ。「なんとかかんとか」って言ったら、日付と持ち物と時間だけやさしくしてって言って、とか。日付だけ丸で囲んでとか、そういう風になると伝わるから、いつ何時だけ、弁当とかっていうのがわかれば来れるからって言うのは、言ったりはしますけど。(通番102)

教育現場で働く教員が「やさしい日本語」を「新たな分野」のもので「難しい」と捉えている理由の1つに、情報の正確さのみならず、常に高い完成度が求められる学校発出文書がずっと残ってしまうことへの恐怖や抵抗感があると推察される。2.3で挙げたように「教員対象やさ日研修会」では日本人母語話者が考える「丁寧な日本語」が外国人にとっては必ずしも「親切な日本語」ではないことを内容の1つとして取り上げている。また、前述の(4)でも触れられていたように、長い文章が「やさしい日本語」で短くわかりやすくなるまでに一定の時間を要していることから、実は「やさしい日本語」で書くことは多くの教員にとってはハードルが高く簡単なことではないという現状もうかがえる。その現状に対し、例えば重要な情報を丸で囲んだり、必要最低限の語句を併記したりするというような小さな工夫で、完璧に書かなければいけないという心の負担感が緩和でき、伝わる文書になるとT教諭は述べている。

5.5 【自分事として捉える意識と場】

では、「やさしい日本語」普及には何が必要なのだろうか。それはT教諭の考えでは、自分事として捉える「意識」と「場」であるという。

- (11) T：切迫感じゃないですかね。その教務と教頭先生の伸び方が目覚

ましいので、あのメールの。最初のひどい日本語から、やさしい日本語から、学期末のすばらしい日本語に、たった1年で。教務の先生と教頭先生はこう文章を作ってくれるようになったわけですよ。だから、もう、「やらなきゃ…」っていう気持ち。(通番96)

- (12) T : で、私もパソコン、嫌なんですけど、今、自分がこの主幹って立場になって、先生方にこう、パソコンを使って色々アンケートも取らなきゃいけない、データも取らなきゃいけない、出席もやらなきゃいけないっていう立場になって初めてやるから。やれるようになってきているから。やっぱ、どうしても無理やりにも、そういう場がないと、それは難しいのかなって。その「場」がある。(通番97)

T教諭は前述の(4)の例について再度触れながら、「切迫感」という言葉を用いて説明する。1年という短い期間で「やさしい日本語」を習得した2人にT教諭は驚き、職務上の必要性に迫られ苦手なパソコンを使いこなせるようになってきたという自身の経験も例として挙げつつ、その理由を必要性に迫られることで、他人事ではなく、自分事として現状を捉える意識と場があったからと分析する。これは前述の(2)(8)で触れられている「通訳」の存在にも関係しており、通訳の存在が恩恵にも障害にもなりうるということではないかと推察される。

5.6 【ユニバーサルな存在】

「やさしい日本語」が外国人児童のみでなく、日本人児童にも必要だと思うかという問いに対するT教諭の回答は以下のようなものである。

- (13) T : 必要、ユニバーサルですね。必要だと思います。あのJSLカリキュラムがそうなんですけど、外国の子に教える時には、授業のやさしい日本版みたいなもんなんですよ。あの、日本語を

教えながら絵を使いながら言葉を教えながら、分かりやすくするっていうことは。要するにJSLカリキュラムができることは、日本人の低児（筆者注：「学力が低い児童」の略。教育用語ではない）の子が理解できる。で、それは「やさしい日本語」も一緒だと思うんです、はい。（通番108）

T教諭が勤務するA小学校には5.1で前述した取り出し教室があり、JSLカリキュラムによる日本語と教科の統合学習を行っている。そこでの教授経験があり、現状に精通しているT教諭は「やさしい日本語」は、日本語を母語としない外国人児童だけでなく、学力が低い日本人児童にも有効でユニバーサルなものを見なしていることがわかる。例えば、算数で出てくる「平行」という学習言語をどのように教えるかについて以下のように述べている。

- (14) T：ただ、取り出しの時には、それは意識して直線、これはまっすぐな線、平行交わらない、どこまでもこうならないよ（筆者注：両手を使って平行の概念、つまり、同じ距離を保持し両手が交わらないということをジェスチャーで示す）ってやるけど、それはやっぱり私みたく、何でも何でもやってきたからできることであって、一般の先生がそこまで外国の子のためだけにやるのは難しい。ただ、低児の子がいるから、そういう子にわかるようにするために、まっすぐだよ、交わらないよ。それを平行だよってやれるのは年配のセンスだ、と思います。だから、意識せずにやってると思いますけど。（通番106）

(14)の語りから、生活言語とは異なる学習言語を教える際にジェスチャーを交えた「やさしい日本語」が時には日本人児童にも必要とされることがわかる。また同時に、日本語指導担当教員としてこれまで努力を重ねてきたT教諭の自信と自負が感じられる。

5.7 【果たす役割の制約性】

一方で、ユニバーサルと見なす「やさしい日本語」はあらゆる場面で万能というわけではないことをT教諭自身が自覚している。

- (15) T：先生たちは簡単な言葉に置き換えて子供に伝えなきゃっていう意識はあるので、1年生を持った時とか経験あると思うので、その点は、あの、いいと思うんですね。ただ、学習言語が出てきた時にそれをどうやって教えるかっていうのは、やっぱり平行は平行だけど、同じ線に向かい合っていく時に、このどこまでも交わらない直線だよ。交わらないとか、直線とか、どこまでもって、言葉を全部置き換える。まっすぐな線だよっていうところまでは、頭を切り替えて授業をしてるかって言ったら、私はしてないと思います。(通番104)

「やさしい日本語」を必要とする外国人児童を取り出して教える際、経験の長いT教諭のような日本語指導担当教員が(14)にあるようにジェスチャーも交えながら学習言語を1つ1つ丁寧に教えることはある程度可能である。しかし、日本語指導担当教員ではない一般の教員が通常の授業の中で「やさしい日本語」を常に意識しながら指導するのは難しい。また、学習言語のすべてを「やさしい日本語」で置き換えるということは現実的ではないと推察される。さらに、「やさしい日本語」のみの授業は別の問題をはらむものである。

- (16) T：ただ、「やさしい日本語」だけで日本人がいいかって言ったら、それはやっぱりダメなんですよ。学習の言葉もあるし、教科書でそれなりのボキャブラリーを増やしていかないといけない。思考力だって、5年生の思考力、2年生の思考力があるので伝えるけど、最終的に使う言葉は正しい日本語を使わなきゃ意味ないので、難しい。そこが大変ですかね。(通番109)

T教諭は学力が低い日本人児童にとっては「やさしい日本語」は学習をサポートするための通過点に過ぎず、思考力の育成には最終的に「普通の日本語」が必要だと考え、「やさしい日本語」の使用範囲や場面には限界があると捉えており、言語観がうかがえる語りであった。

5.8 【潜在的な可能性を有するもの】

筆者らがT教諭と同じように考える教員が増えてきている実感があるかどうか尋ねたところ、以下のような語りがあった。

(17) T：目に見えてはない。〈ない〉ないけど、やれそうな若者はいますね。で、やってくれる可能性のある先生はいると思います。はい、やっぱり若者です。若い先生は頭が柔らかい。やるなら、やっぱり若い先生を育てたいって思います。もちろん、その、年配の先生がダメとか、そういうことじゃなくて。(通番91)

(18) T：だから、そういった意味で人材育成っていうか、日本語だけじゃない育成をしてかなきゃいけない。その中に「やさしい日本語」もあるし、授業の仕方もあるし、学年間のコミュニケーションもあるし、生徒指導も家庭指導もその中の一部なんですよ、ね、「やさしい日本語」っていうのは。(通番94)

インタビュー当時、教務主任だったT教諭の語りからは若手教員を育成するという職務上の強い使命感が伝わる。多くの教員にとっては新しい分野であり難しいというイメージを持たれがちな「やさしい日本語」を若手教員は柔軟に取り入れられ、そこから教員として大きく成長するとT教諭は期待している。

一方、この期待は若手教員に対してだけでなく、外国人児童にも向けられている。今後も増え続けると予想される外国人児童に対し望むこととして、T教諭は以下のように語っている。

- (19) T : 国籍のね、条項があるもんだから、(将来) 先生にもそうならないけど講師にはなれるんですよ。だから、この子たちは、自分たちは〇〇人だ、△△人だ、□□人だってことをちゃんとわかった上で、大人になってもらいたいんですね。アイデンティティをちゃんと持った上で、それで母国に帰るのか、日本で暮らすのかを決められるように、今はその思考力、伝える力、表現力っていうものを身につけさせる時だと思うんですね。(通番116)
- (20) T : だから、「やさしい日本語」では理解はできるけど、結局、表現で伝える時には「やさしい日本語」じゃダメなんで、そこに持っていくまでのギャップとかもあると思うし、能力もあると思うけど、私はどの子にも等しく同じ指導をしたいと思うし、指導要領に載っていることの最低限は伝えたいし、身につけてもらいたいと思ってます。(通番117)

T教諭は外国人児童に対しても「やさしい日本語」を突破口にし、より高度な思考力や表現力を育てて将来につなげ、大きく成長してほしいと願っているようだ。以上の点から「やさしい日本語」は未来への可能性を秘めたものと捉えることができるのではないだろうか。

6. 考察

外国人児童が多い小学校で長年にわたり日本語指導を行ってきたT教諭が「やさしい日本語」についてどのように捉えているのかをインタビュー調査で探った。そこで得られたデータをSCAT分析し抽出された構成概念は「気づきを促すきっかけとなる研修会」「一定の成果に対する達成感」「周囲への期待値の低さ」「文書の恒久性に対する懸念」「自分事として捉える意識と場」「ユニバーサルな存在」「果たす役割の制約性」「潜在的な可能性を有するもの」の8つであった。

ストーリーラインとは、大谷(2008)によると「データに記述されている出来事に潜在する意味や意義を、主に〈4〉に記述したテーマを紡ぎ合わせて書

き表したものであり、「再文脈化」するものである。また、このストーリーラインを「断片化」したのが理論記述である。以下に本調査結果から得られたストーリーラインと理論記述を記す。なお、ストーリーライン中のコードは下線で示す。

【T教諭の「やさしい日本語」の捉え方のストーリーライン】

外国人児童の多い小学校での日本語指導担当教員歴が長いT教諭は、「やさしい日本語」研修会は教員の気づきを促すきっかけとなると考えている。これまで「やさしい日本語」普及に向けて長年にわたる努力を重ね、一定の効果に対する達成感を自覚しながらも、一方では依然として普及が進まぬ現状を受け入れて諦観し、周囲への期待値の低さも見せている。その一因に教員の文書の恒久性に対する懸念があり、普及を進めるためには自分事として捉える意識と場が必要だと考えている。また、「やさしい日本語」をユニバーサルな存在と見なす一方で、その果たす役割の制約性を認識している。さらに、若手教員に対しては「やさしい日本語」の伝播と教師としての成長、外国人児童に対しては将来に繋がる日本語力を期待しており、両者に潜在的な可能性を有するものと感じている。

【理論仮説】

- ・「やさしい日本語」研修は、気づきを促すきっかけとして有効である。
- ・「やさしい日本語」普及活動は一定の効果はあるものの、周囲への期待値は高くない。
- ・「やさしい日本語」の普及が進まぬ背景には、書いたものが残ることへの抵抗感がある。
- ・「やさしい日本語」普及のためには、自分事として捉える意識と場が必要である。
- ・「やさしい日本語」は、ユニバーサルなものだが、それだけでは限界もある。

・「やさしい日本語」は、若手教員の成長を促進し、児童の将来につながる豊かな日本語力を育む潜在的な可能性を持つものになりうる。

今後の「教員対象やさ日研修会」に求められる重要な役割の1つは、研修会を継続し、日本語指導担当教員以外の教員にも「やさしい日本語」についての気づきを広く長く促し続けることである。現在の勤務校にバイリンガル支援者がいる場合でも、外国人児童が少ない学校に移れば状況が一変する可能性もある。その際「やさしい日本語」こそがコミュニケーションツールとなる点を言語化して伝え、当事者意識を涵養することも今後の研修会講師の大切な役割となるだろう。また、これまで通り「丁寧な日本語が親切な日本語ではない」と説いたうえで、「『完璧な日本語で伝える』より『確実に伝わる』こと」の肝要さ（寛容さ）を伝達し、文書作成における意識の転換を図ることも不可欠である。「やさしい日本語」は外国人児童のみならず、学力が低い日本人児童にも必要なものであるが、それだけでは豊かな日本語力は育まれない。研修会では「子どもの日本語力の伸びに応じて『やさしい日本語』の使用量、使用頻度を減らしていくこと」や「『普通の日本語』に『やさしい日本語』を添えること」の重要性を引き続き伝えていきたい。「やさしい日本語」には限界もある。その制約性を念頭に置きつつ、「やさしい日本語」の果たす役割とその範囲を適切に研修会で伝えることが求められると言えるのではないだろうか。

7. まとめと今後の課題

本研究では、小中学校における「教員対象やさ日研修会」のあり方の参考にするため、日本語指導担当教員歴が長いT教諭が教育現場で「やさしい日本語」をどのように捉えているのかを知ることを目的としインタビューを行った。SCAT分析からは「気づきを促すきっかけとなる研修会」「一定の成果に対する達成感」「周囲への期待値の低さ」「文書の恒久性に対する懸念」「自分事として捉える意識と場」「ユニバーサルな存在」「果たす役割の制約性」「潜在的な可能性を有するもの」の8つの構成概念が抽出された。これらから示

唆される「教員対象やさ日研修会」のあり方は、まず研修会自体が「やさしい日本語」への気づきを促すきっかけともなり、また当事者意識を涵養する場にもなりえるものであるということである。

課題として、本研究では外国人児童が多い小学校において日本語指導担当教員としての経験が長いT教諭1名のみを調査対象としており、日本語指導担当教員ではない教員や教授歴が短い若手教員へのインタビューを取り上げることができなかった点が挙げられる。また、実際の教育現場で「やさしい日本語」がどのような形や頻度で用いられているかも本研究では扱えなかった。今後の検討課題としたい。

注

- 1 出入国管理庁 https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00036.html (参照日 2024.3.25)
- 2 「外国人児童生徒」か「外国籍児童生徒」かの名称について、本稿では、日本国籍か外国籍かの内訳や区別の必要がある場合、参考文献にそう記されていた場合には、「外国籍」を用いる。それ以外は、基本的に「外国人児童生徒」を用いる。斎藤・池上・近田(2015)は、「外国人児童生徒」について、「外国籍児童生徒に限定するものではなく、文化間移動を経験し、日本語日本文化以外の多様な言語文化背景をもって学んでいる子どもを指します。日本籍の子どもも、国際結婚家庭の子どもも含むものです」(p.10)と述べており、本稿でもそれに倣うこととする。
- 3 文部科学省「報道発表 「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査(令和3年度)」の結果(速報)について」https://www.mext.go.jp/content/20220324-mxt_kyokoku-000021406_01.pdf (参照日 2024.3.25)
- 4 学校教育におけるJSLカリキュラム https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/008.htm (参照日 2024.3.21)
- 5 特別の教育課程による日本語指導 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/kaigi/_icsFiles/afieldfile/2013/03/04/1330284_1.pdf (参照日 2024.3.21)
- 6 注4の資料によると、取り出し指導に当たる日本語指導担当教員は、常勤・非常勤を問わず、実際に日本語指導を行う教員等のことである。
- 7 入り込み指導には日本語指導担当者も関わることもある。
- 8 研修会参加者には職員が毎回1、2名いたが、ごく少数のため、本稿では「教員対象」とした。
- 9 その他の高割合の回答として、2)は「明日からの授業ですぐに活かせる研修内容」「実践的なワークがあったこと」「普段何気なく使っている日本語を改めて見つめ直すきっかけになった」、3)は「やさしい日本語にも色々な種類があることがわかった」、4)は「どれが多義語・多義文法が見分けること」「初級文法の組み合わせを易しく言い換える

こと」などが挙げられる。

- ¹⁰内訳は、外国籍児童数が31人、帰国児童数1人、外国に繋がる児童数(日本国籍)3人である。
- ¹¹就学支援員は教員ではなく、単独での授業の指導はできないため、「入り込み指導」ではなく「入り込み支援」という言葉を使っている。
- ¹²やさしい日本語ツーリズム研究会 <https://yasashii-nihongo-tourism.jp/> (参照日 2024.3.26)
主に、大学の授業(一部専門学校や高等学校を含む)での実施と思われる「大学・学校など」は115件となっている。

参考文献

- 石井由理・川崎千枝見(2022)「国際理解教育の一環としての「やさしい日本語」演習」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第53号 7-14
- 岩田一成・柳田直美(2020)『「やさしい日本語」で伝わる! 公務員のための外国人対応』学陽書房
- 臼井智美(2016)「外国人児童生徒外国人児童生徒教育に関する教員研修プログラムの開発 子ども理解力と教科指導型日本語指導法の習得」『日本語教師教育学会年報』第25巻 90-100
- 大谷尚(2008)「4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案—着しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』54(2) 27-44 名古屋大学大学院教育発達科学研究科
- 大谷尚(2011)「SCAT: Steps for Coding and Theorization—明示の手続きで着しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法—」『感性工学』Vol.10 No.3 155-160 日本感性工学会
- 齋藤ひろみ・池上摩希子・近田由紀子(2015)『外国人児童生徒の学びを創る授業実践「ことばと教科の力」を育む浜松の取り組み』くろしお出版
- 坂本勝信・安井朱美(2023)「学校版やさしい日本語の手引き—小中学校の教員対象研修会から見えるもの—」『常葉大学外国語学部紀要』第40号 31-53
- 滑川恵理子(2023)「日本語指導を必要とする児童を担任する教員のニーズ—京都市内の小学校教員を対象とする実態調査の再分析—」『人文論叢』第71号 39-61
- 浜松市教育委員会(2023)「外国人子供教育支援推進事業 説明資料」
<https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/documents/85593/gaikokujin050501.pdf> (参照日 2024.3.14)
- 古川教子(2017)「外国人児童生徒の教育において教員が感じる困難および意義に関する一考察」『共愛学園前橋国際大学論集』第17号 39-50
- 三好大(2022)「外国人児童生徒教育研修会のためのオンデマンド型動画教材の導入—初任日本語指導担当教員の実践上の課題の解決に向けて—」『国際教育評論』第18号 15-32